

SYDきらめきメッセージ 全国コンクール

1. 趣 旨

小学生から青年までの勇気や感動を与えてくれるきらめき体験談を全国的に募り、選ばれた各部門の優秀者が自らのきらめき体験を青少年たちの前で発表する。このことにより、同世代への大きな励ましのメッセージとなり、“勇気”“元気”“やる気”を与え、社会の一員として自らや周りを輝かせ、生きる力を育むなど青少年の健全育成に寄与する。

2. 募集と選考

SYD事業参加者をはじめ、全国の小学校・中学校・高等学校、都道府県教育委員会、社会教育団体、青少年団体に広く募集した。応募者 3,631 名の中から選考委員・担当者職員により 15 名を選考し全国コンクールをおこなった。

3. 全国コンクール審査の観点及び方法 (SYDらしさ、メッセージコンクールである)

全国コンクールは平成30年2月11日(日)SYDホール会場に実施した。

1) 発表者の順序・配慮

- ・発表は低年齢の部門から低年齢順に原則として発表する。
- ・発表者が精神疾患など人前で発表できないような人でも、ビデオ等で対応するなどして参加できるよう配慮する。
- ・発表時間は、小学生3分程度、中学生以上は4分から5分まで。
※発表者の時間の経過をボードで知らせる(1分前、終了の2回)

2) 審査の観点

登壇から降壇までの発表者の全身から伝わるメッセージを審査員の感性により10点満点で採点する。(低年齢者に配慮し、たどたどしくても一生懸命さなどメッセージが伝わってくるものも評価)

- (1)メッセージは、きらめき、ブレイクスルー、自分の中の奇跡などの体験談である
- (2)メッセージは、ささやかな出来事であっても、ほのぼのとしたもの、心が温かくなるものである
- (3)メッセージは、困難や挫折をのり越え、同世代への大きな励ましになるものである
- (4)メッセージは、青少年に“勇気”“元気”“やる気”、そして感動を与えてくれるものである

3) 審査委員会

審査委員により以下の賞を決定する

☆文部科学大臣賞1点 ☆理事長賞1点 ☆優秀賞3点 ☆きらめき賞等数点

- ・文部科学大臣賞は各部門最高得点者の中から審査し決定
- ・理事長賞は最もSYDにふさわしいものを理事長が選考し決定
- ・優秀賞は部門に関係なく高得点者を優先して審査し決定
- ・きらめき賞は発表者全員を表彰

4. 審査委員

委員長：御手洗 康（S Y D理事長）

明石 要一（千葉敬愛短期大学学長）

安仁屋 聡（放送会社執行役員）

石田 博嗣（特別養護老人ホーム介護室長）

両家 優子（航空会社客室乗務員）

古賀 克彦（北九州市立小学校校長）

宝井 琴柑（女流講師）

田中 浩史（跡見学園女子大学教授）

山崎 一紀（S Y D主幹）

青木 富造（S Y D常務理事）

5. 発表者（市町村、学年または年齢、氏名、テーマ）

☆小学生の部

- | | | | |
|---------|-------|-------|----------------------|
| ①千葉県市川市 | 小学校3年 | 久保田 健 | 3回目のS Y Dキャンプでまなんだこと |
| ②広島県三原市 | 小学校5年 | 河野 愛伽 | ありえない経験から知った人のぬくもり |
| ③沖縄県西原町 | 小学校6年 | 末吉 麻美 | 貧しい子ども達の話聞いて |

☆中学生の部

- | | | | |
|----------|-------|-------|---------------|
| ④秋田県秋田市 | 中学校2年 | 板垣 諒 | 周りのサポートがあったから |
| ⑤香川県善通寺市 | 中学校2年 | 池川 友菜 | 信じること |
| ⑥高知県中土佐町 | 中学校2年 | 橋田樹理愛 | 障害を持っても |
| ⑦東京都目黒区 | 中学校3年 | 川瀬明日香 | サラムッポ |

☆高校生の部

- | | | | |
|---------|--------|-------|-------------------|
| ⑧群馬県前橋市 | 高等学校1年 | 根岸 美葉 | 共に笑顔で歩む |
| ⑨東京都杉並区 | 高等学校1年 | 近藤 結唯 | 絶望の先にあった一つの答え |
| ⑩宮城県岩沼市 | 高等学校2年 | 齋藤美珠穂 | 小さな幸せを目指して |
| ⑪山口県山口市 | 高等学校3年 | 三笠 晴香 | 誰かを支え、生きるパワーを与えたい |
| ⑫沖縄県糸満市 | 高等学校1年 | 三木 想真 | 夢の見つけ方 |

☆青年の部

- | | | | |
|-----------|------|-------|------------------|
| ⑬神奈川県横浜市 | 大学1年 | 白井 基晴 | 笑顔の理由は |
| ⑭広島県呉市 | 社会人 | 河原 紫織 | 働くということ、苦しむということ |
| ⑮神奈川県相模原市 | 社会人 | 保田 健太 | 進化することを楽しみに |

集合写真



文部科学大臣賞



進化することを楽しみに

保田健太（神奈川県・青年）



きらめきメッセージ全国コンクール



↑ 来賓挨拶

文部科学省 総合教育政策局
地域学習推進課 青少年教育室室長
平川康弘氏



↑ 主催者挨拶

理事長 御手洗康

授賞式



↑ 文部科学大臣賞授与



↑ 理事長賞授与



↑ 優秀賞授与

人間は、弱いけれど強くなれる。そして、誰もがプラスに転じる潜在能力を持っている。それを引き出すのは、感じる心とチャレンジする姿勢だ。だから、困難は強くなるためのチャンスなのだ。私は迷路のように現れる壁と向き合い、そう自分に言い聞かせ生きて来た。

平成6年、私は大望の男の子として誕生した。だが、全身に運動神経の麻痺があり、医師から絶望的な宣告をされた。具体的には、人間が成長と共に自然に出来るようになる日常生活の全てを、訓練で身に付けていくしかないということだ。私の体は、まるでコンセントを差していない電化製品のような体だった。それでも0歳から毎日続けた訓練が功を奏し、次々に奇跡が起きた。4歳で言葉を発した。スプーンやフォークで食べられるようになった。6歳には介助箸も使えるようになった。幼児期はいれんを起こし、何度も命の危機に直面した。その度「命にありがとう。」と感謝し、「笑顔で乗り越えよう。」と誓った。

それから私は普通校に通ったが、左手がゆっくり使える程度だったので作業には苦しんだ。神経の麻痺というのは限りなく厄介者だ。座った状態で手を使うにも、体幹で体を支えバランスを保ち、肩甲骨から腕の筋肉を全て使う。もちろん、足の支えも必要で、常に全身の訓練が必要になる。私は家での訓練だけでなく、ジムや水泳にも積極的に取り組んだ。

その中で一番苦労したのは文字を書くことだ。1日3時間の練習で、2センチのマスに書けるようになるまで10年かかった。それまでは大きな解答用紙でテストを受けていた。中2の時「保田君も漢検受けてみよう。」と先生に勧められた。私は友達と同じ経験が出来ると思い、もの凄く嬉しかった。まずは10級から受験し、4級まではスムーズに合格した。

だが、3級は甘くなかった。解答欄も小さく文字の画数も多い。私の弱点は、止め・はね・はらいなどだ。微調整が上手く出来ず、隣の文字と接触してしまう。私は悔しくて激しく障害を憎んだ。そんな時、母はいつも甲子園のDVDをかける。私の特効薬だからだ。3日目くらいに、逆転に次ぐ逆転の壮絶な試合を見た。私には、まだまだ出来ることがあると反省し、毎日300回の腹筋を始めた。

だが、2度目も自己採点より20点低く、5点足りず不合格だった。その夜、私は豆だらけの手を見つめ鉛筆を振り上げた。振り下ろした瞬間、驚いた。鉛筆が刺さっていたのは母の手だった。母は静かに「悔しいよね。でも、3級までは絶対に合格すると始めたんだから、もう1回頑張ろう。」といった。

それから1ヶ月が過ぎた。私は甲子園の大逆転の試合を見ていた。球児の言葉に胸が熱くなった。「諦めないことの大切さと、どんな状況でも楽しむことを意識して戦いました。苦しいことを乗り越えたことが一生の宝物です。」自分の向かい方次第で人は輝ける。私も宝物が欲しくなった。そして、人間の強さと可能性を信じることにした。私は腹筋を500回に増やし、手の感覚訓練も強化した。

3度目の挑戦でついに合格した。私は天にも昇る心地でガッツポーズをした。諦めずに努力を続けたから、この喜びがある。人それぞれに壁があり内容は違う、でも努力する姿勢が壁を突き破ることに変わりは無い。

現在、私は24歳。就職には至っていないが、市のサポーターを努めボランティア活動に精を出している。私が公の場に出ることで、誰かの役に立てばと思っているからだ。

私は高校野球から学び考えた。限界ははじめてから存在しているものではなく、あると思いついて入っているだけかもしれない。自らの弱心が作り出した、自分にしか見えない壁ではないかと。だから目標を掲げ行動し、それを一つひとつ達成しながら未知への挑戦を続けよう！自分を信じ、仲間を信じ、新たな出会いを大切に。今日は再び来ないから、さらなる飛躍のため、勇気を胸に一步踏み出そう！進化することを楽しみに。前へ。明日へと。

理事長賞



小さな幸せを目指して

齋藤 美珠穂 (宮城県・高校2年)



「痛いよ。ごめんなさい。もう、やめて」物心つく頃から義父からの暴力を受け続けた。私の体には生傷が絶えず、心は恐怖で憔悴しきり、これが私の日常。

中学生になると暴力は激しさを増した。痛みが引かず、やむを得ず保健室に行くと体の傷が見つかり大事になった。学校から市役所に通報されて、その日のうちに父親との別居が決まった。殴られるのが普通だと思いが家の常識は、非常識だと言うことを知った瞬間でもあった。殴られず、怒鳴られず、恐怖もない平穏な生活が過ごせると安堵していたが、その願いはすぐに崩れ落ちることになる。

母と弟二人の新生活が始まったが義父から約束したはずの養育費は支払われず、経済的な困窮が私達家族を襲った。子供三人を養うためには仕事が必要だが、シングルマザーかつ家事をするために早めに帰らなければならず、パート経験しかない母の就活は難航した。

そんな時、何気なく見ていたテレビから男性コメンテーターが女性に対して男女差別の発言をしたニュースが流れた。愕然とし「母の苦労はこれかも」と調べてみた。

男女雇用機会均等法や男女平等を謳う日本の女性政治家の割合は13.7%(決して高くない。保育所不足による女性の社会進出の妨げや、学童保育の預かり時間が早く女性は残業が激しい。このように、女性を取り巻く働きにくい現状にショックを受けた。

そんな中でも私達の前では決して弱音を吐かない前向きな母。陰で涙を流しても。常に笑顔を保つ母。就活と並行して夜遅くまでのパートと育児、家事をこなし、頑張りを続けていた母。それでも仕事が決まらない母を見て「努力って虚しい。私達は幸せになってはいけないのかな」と悲観した。それでも前向きな努力をし続ける母のことが不思議で仕方なかった。

ある日、トイレの中から友人と電話する母の声が聞こえた。駄目と分かりながら聞き耳を立てると、「私は大丈夫。確かに辛いけど子どもたちの為だし。辛い思いは二度とさせたくないから」と話していた。私は部屋に戻ると布団の中で声を殺して泣き続けた。現実から逃げていたのは私で、私達を育てるために一人戦っていたのが母だった。

その日を境に、母一人に負担にならないように姉弟で家事を分担し、家族で力を合わせて生活することを決めた。洗濯、食事、掃除を一生懸命にやり続けると、いつしか苦もなくすべての家事をこなせるようになっていた。もちろん、学業が下がれば母が心配すると思い勉強も力を抜かなかった。

数か月後、母の頑張りを見ていた知人が、自らの会社に就職を勧めてくれ、準社員の内定をいただくことができた。母の努力と諦めない気持ちに手を差し伸べてくれた方に心から感謝した。今では家族一丸となってどんな問題も解決できるはずだ。

私の将来の夢は母のように苦しむ人を助ける社会福祉士になること、現在の日本では三組に一組が離婚し、シングルマザーの平均年収は200万と低く、子育てをしながら男性同様に働くことは難しい。だからこそ、女性一人で自立するためにはたくさんのサポートが必要はずだ。私が今まで必死に隠した辛い記憶と身体の傷は、この仕事では大きな武器になる。苦しみと痛みが判るからこそ、当事者の気持ちになり接することができる。

別居から5年が経過し家族の肉体的傷は目立たなくなったが、心の傷は消えることはないだろう。しかし、人と人の絆が私達家族を癒してくれた。これから自らの過去と向き合いながら、私の仕事でたくさんの家族を救いたい。「今は辛いと思うけど大丈夫。必ず笑える日がくるよ。」と過去を導けるようにと。

優秀賞



ありえない経験から知った人のぬくもり

河野 愛加 (広島県・小学校5年)



日付が変わった七月七日の夜中一時、家が響くほどの大きな音に起こされ、停電になりました。あわてて二階に駆け上がり、窓の外を見ると家の前の道は激流の川になっていました。

少しすると、家が流された向かいのおじちゃんや、土砂が家に流れ込んだ近所の人たちが私の家に逃げてきました。

数時間後、消防隊や警察の人たちが助けに来てくれました。避難する時、いろんなものが足元にありました。タイヤ、じょうろ、大きな石、そしてたくさんの土砂等。ひざぐらいの深さの川の道は、流れが速く、この中を逃げることを考えると、とても怖くて泣いてしまいました。そんな時、四つ上の姉が「大丈夫だよ。」と、ずっと声をかけてくれました。

この土石流の中、流されずに庭に残っていた金木せいの木に、消防隊の方が命綱をくりつけました。そしてそれを必死ににぎり、消防隊の人が一人ずつ優しく声をかけてくださりながら、川になっていない安全なところまで私達を連れて行ってくれました。

私はこの災害を通じて、たくさんの人に助けてもらいました。

あの豪雨の次の日から、父の職場の人たち、近所の人たち、つながりのある方々、そしてボランティアの方々が、今も復興作業に汗を流しながら頑張ってくださいています。たくさんの方の温かい気持ちがとてもうれしく、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

これからもしかすると生きている中で、今回のようなあり得ないことが起るかもしれません。でも、人々が助け合いをし、協力することによって、人はうれしい気持ちになります。

私は、この夏の経験がなかったら、助けてもらうことのありがたさを知らなかったし、まわりの人の温かい気持ちに気付かなかったと思います。

もし辛い思いをしている人がいたら、今度は私がまわりの人を助け、少しでも人の心を明るくすることができたらうれしいです。

今回の豪雨は、本当につらい体験でした。でも、まわりの人の温かさにふれて、今までより人のために何かしたいという気持ちが大きくなりました。



↑ 出場者のみなさん

優秀賞



絶望の先にあった一つの答え

近藤 結唯（東京都・高校1年）



突然ですが、考えてみてください。あなたは、朝起きたら「おはよう」と言える誰かがいますか。それとも「あのね」と悩みを相談できる人がいますか。それとも「ありがとう」と感謝を伝えることができる誰か、または出来事がありますか。そして「今日も生きていこう」そう思える原動力はありますか。

私は、父、母、妹の4人家族に生まれ、中高一貫校に進学し、そこで先生方はもちろん、たくさんの友達にめぐまれました。優しい人たちに囲まれて育ってきた私にとって、先ほどの質問は「当たり前」な事でした。ですが私が思っていた「当たり前」が「当たり前」ではない人たちが世の中には存在します。そして私はこの事実を中学で入部したチアリーディング部で学びました。

中学3年生になったある日。私は後輩と共に夏の大会に向けて日々の練習に力を入れていました。大会2日前となったある練習の日、チームは丸となって最終修正の段階に入っていたとき、私にとって忘れられない悲しい出来事が起こりました。

チーム演技で上に乗っていた子がバランスを崩し、下にいた私が助けようと手を差し伸べた時、彼女の肘が私の左目を強く突きました。「ガン」と骨が折れる音がしたのを今でもはっきり覚えています。私はその場にしゃがみ込み、先生が慌てて駆け寄ってきました。

そして次の日の朝、病院で診察を終えた私は言われました。「近藤さん、至急手術ですね」と。言われた途端、私は意味が分かりませんでした。「明日大会だよ、私は手術なんて受けている場合じゃないけど」と。当時の私にとって大会に出ることは自分の努力を生かせるためにあるのだと、夏の合宿でも、どんなにつらい練習でも全力で取り組んでいたつもりでした。それなのにその目標が一瞬にして消えました。

手術を終えた一週間後には無事退院できましたが、チアリーディングには復帰できずにいました。その間に同輩はどんどん上手くなり、私を追い越していく姿を見ることしかできませんでした。そして上達していく同輩と、指導者をも恨み始めました。何で頑張っている私は報われなくて、そこそこの努力しかしていない人が成功するのだろう。どうして人生って不公平なんだろうと。

そんな時あの有名なキャラクター、ミッキーマウスの生みの親であるウォルトディズニーがかつて言っていた言葉に出会います。それは“The past can hurt. But the way I see it, you can either run from it, or learn from it”です。「過去の出来事に傷つけられることもあるだろう。でも私が思うに、そこから逃げることもできるが、そこから学ぶこともできる」です。この試練が、私に与えられたのには何か意味があるはず。私はこの試練を良い経験へと変えなければいけないと。

そして手術や入院経験、つらい経験をした身として、もっとつらく弱い立場の人達のために自分ができる事を見つけるため、ホームレスの方々への炊き出しや障がい者の方へのボランティア活動に参加しました。

そこで私にとって当たり前と思っていたことが、境遇の異なる人たちはとても幸せな事とされていることに気づきました。そしてこの事実から、私はホームレスの方や障がい者の方にとって「当たり前でないこと」を「当たり前」にしたいと考えました。周囲の働きかけと当事者自身の考え次第で、不平等はなくなることを証明したい。そのためにこれからもボランティアを通じて、まず自分の周りにいるマイノリティーな立場にいる人のために、自分ができることを可能な限りしたいと考えようになりました。

その次は日本から世界へとその挑戦を広げたいと考えています。日本で経験した弱い立場にいる人たちの現状が、世界規模ではどうなっているのか。例えば、ゴミ拾いでしかお金を稼げない人々がいる不平等、児童労働により教育を受けられない子ども達がいる不平等。世界から不平等を少しでも減らしたい。これが実経験から私が見つけた私自身の目標です。

優秀賞



誰かを支え、生きるパワーを与えたい

三笠 晴香（山口県・高校3年）



私には「絶対に叶えたい!」と思える夢がなかった。絵を描くことや手芸をすること、楽器を演奏することといった、好きなことは沢山あった。しかし、どれもそれを仕事にしたいとは思わなかった。そうはいっても高校3年生にもなれば、将来の職業は考えなくてはならない。キャリア関係の本を読み漁り、親や友達にも相談する中、悩んだ末、保育士になることを決め、短大に進学しようとしていた。

そんな時、私の人生の中で最も衝撃的なことが起きた。「滑膜肉腫」という悪性腫瘍。いわゆる癌が、私の身体にできてしまったのである。私は突然の出来事に目の前が真っ黒になり、「17歳と若いだけに癌細胞の進行も早いかもしれない。」という恐怖感が私を襲ってきた。当然、治療に専念するため受験は延期になってしまった。いやそれどころか、私はこの先、生き続けることができるのか、絶望感に打ちひしがれた。

治療は手術と薬物療法の2つが実施された。もちろん、今までそんなことはしたことがなく、初めて経験する治療だった。治療が進むと同時に、私の心と身体は疲れきっていった。特にメンタルはボロボロだった。「どうして私がこんな辛いことをやらなきゃいけないんだ。」「今すぐ病院を抜け出したい。」と、ぶつけどころのない怒りと不安でいっぱいだった。しかし、そんな気持ちを忘れられる唯一の時間があつた。それはリハビリテーションの時間である。気分転換になるようにと、担当医がリハビリを入れてくれていた。最初は「リハビリなんてしても、どうせ何も変わるわけない。」と思っていたが、リハビリの先生はとても優しく、話しやすい方だった。私は人見知りだったが、この先生にはすぐに心を開くことができ、だんだんリハビリの時間が楽しくなっていた。その先生は、当時放送されていたドラマなどの、病気以外の話題を出してくれた。そのおかげで、リハビリの時間は病気の事なんてすっかり忘れることができ、それまで笑顔を無くしていた私が、いつの間にか笑っている自分に気づいたのだ。そして、よく「病は気から」というが、それが功を奏したのか、癌細胞もほぼ消滅し、退院できるところまでこぎつけたのだ。私がここまで回復したのは、リハビリで心が健康になったのが大きかったと信じている。そんな時間を作りだしてくれたリハビリの先生に、私は憧れを抱いた。そしてその憧れは、いつしか私の絶対に叶えたい将来の夢へとつながったのだ。

私の絶対に叶えたい将来の夢とは、作業療法士になることだ。作業療法士とは、患者さん自身が望む日常生活が送れるよう、患者さんのやりたいことや好きなことを通じて、身体と心の回復・維持をサポートする職業である。そしてその夢を叶えるために、現在は作業療学科のある専門学校を目指して、日々努力を積み重ねている。

人生は何か起こるか本当にわからない。世の中の多くの女子高校生が青春を謳歌している中、どうして17歳という若さで私は癌にならなければならなかったのか…。一時は自分自身の身の上を恨んだこともあった。しかし、そんな私にも必ず叶えたい将来の夢ができた。あのリハビリの時間がなければ、この夢は生まれていなかっただろう。そんな経験をしたからこそ、私はこの夢を必ず実現したいと、心から思う。いつかあのリハビリの先生のように私も誰かを支え、生きるパワーを与えられるようになりたい。

きらめき賞



3回目のキャンプでまなんだこと

久保田 健 (千葉県・小学校3年)



ぼくがSYDキャンプに来て思ったことは数えきれないほどあります。

1つ目は、リーダーがやさしくせってくれたことです。ぼくが物をなくしてしまうと、すぐにさがすを手伝ってくれます。ぼくの村の人たちも、きっと自然村のリーダーをほこらしいと思っているにちがいません。今回のリーダーは、ぼくが今までに参加したキャンプでであったリーダーの中で、一番やさしかったです。来年も、SYDキャンプに来たいと思いました。

2つ目はみんながぼくにあいさつしてくれることです。朝は「おはよう」昼は「こんにちは」夜は「おやすみ」とぼくが何をしていてもあいさつしてくれるから、ぼくの心がしずんでいても明るくしてくれます。ぼくはこのキャンプで、人の心をあかるくするほうほうが「あいさつ」であるということをまなびました。そこで学校や家でも、「あいさつ」で人の心をあかるくしていきたいです。そして「あいさつ」によって、くじけそうになっている人の心をあかるくできたらいいと思います。

3つ目は、リーダーのようなりっぱな人がいるということです。いつも思っているのですが、ぼくたちのためにがんばってくれている姿を見ると、ぼくの心があたたかくなります。ぼくも心を強くして、りっぱになり、みんなにたよられるそんざいになりたいです。そしていろいろなことができるよリーダーになりたいと思います。

さいごに思ったのは、ぼくの村の人たちと、この4はく5かのあいだでたくさんあそべてよかったということです。すこしかぞくにいたいと思ったり、つらいこともありましたが、自然村のみんなとあそべば忘れられます。自然村のみんなは、ぼくにたくさんの元気をくれました。外で雪がっせんをしたり、雪ぞうづくりでちえを出しあったり、とかぞえきれないほどの思い出をつくりました。自然村のみんなは、ぼくの一生わすれられないそんざいになるとおもいます。リーダーはぼくたちをまとめてくれたり、レクリエーションでげきの発表のアドバイスをしてくれました。リーダーはちらかったいるぼくたちのにもつをかたづけてくれました。ぼくは自然村のみんなにささえられました。来年のキャンプでみんなにあえたら、こんどはぼくがみんなをささえる側になりたいです。

この作文をかきおわったあと、みんなとわかるまでのみじかいあいだでも、なにかみんなのためにできたらいいなおもいます。みんなでつくった村かは、一生わすれられません。このSYDキャンプで4つの大切なことをまなびました。ぼくはこのSYDキャンプでまなんだ4つをわすれず、来年のキャンプにやくだてたいです。そのときまで、心も体もつよくなって、みんなをささえていきたいです。

きらめき賞



貧しい子ども達の話聞いて

末吉 麻美 (沖縄県・小学校6年)



私は前に貧しい子ども達という話をテレビで見ました。初めて見たとき私は心が苦しくなりました、「かわいそう。私もいつかこんな所についてお医者さんとして助けたい」と思い決心しました。

私はそのことを父にいうと「お父さんも昔そう思ったよ。でもね、お父さんはできなかった。とても大変なんだよ。」と言いました。

でも、私はいつかぜったいに貧しい子ども達のところにいつて助けたいです。そのために英語や勉強などをがんばろうと思います。

9月16日に人権集会がありました。私は貧しい国を助けたいと思っていたので、興味がありました。内容は、フィリピンの貧しい人達の話でした。子どもはゴミの山からリサイクルとなるものや売れそうな物を見つけ売ったりします。もし私がゴミ山から売れそうな物を見つければとしたら途中でやめようと思います。なぜなら、くさくてよごれててたえられないと思います。話によると「なんのためにやるんですか」と聞くと「お父さん、お母さんをらくにするため」と言ったそうです。私は、「すごいな～。やる気持ちも自分とちがってしっかりしているな」と思いました。

人権集会の中でもとっても感動したのは、小学校6年生の作文です。その子はフィリピンの貧しい子ども達に会いにいつてそこのでき事など感動したことを書いていました。私はこの作文を聞いてとても感動しました。フィリピンで学んだことや会いにいつた子ども達のことなど書いていました。私はこのとき「ああ。私にはとても出きないことだ。私も父のようにできなかったりして」と思いました。

私はこのあとずっと「私にはできないな。」とがっかりしながら聞いていました。その時、「目をとじてください」と言い、目をとじたら、マザーテレサの言葉を話してくれました。どんな内容かというと「今、自分にできることをしないさい」という内容です。私はその言葉、話を聞いて「あ。実際に行かなくても周りの人達を助けなければ意味ないと思いました。この日本にも苦しい人や生活に困っている人がいます。その人たちを助ける、貧しい国の人たちを助けることは同じだとわかりました。私はこのことがわかってもう一つわかりました。それは、フィリピンの貧しい所など私は行けないのにむりと考えてはいけないことです。体験した人達は「また行きたい」「助けたい」と言っています。しかし私は、ただ嫌なだけなのかもしれません。貧しい人たちががんばっているのでも私は嫌な気持ちをなくして将来貧しい人達を助けていきたいです。貧しい人たちだけががんばるのではなく世界中の人達ががんばればみんなが幸せになる世界になると思います。

きらめき賞



周りのサポートがあったから

板垣 諒 (秋田県・中学校2年)



一生忘れられない時期が、小学校の低学年からあった。しかも、それは人生での大きな経験になった。

僕は、人より比較的顔にはくろが多く、怖がりで、はっきり意見が言えない子だった。そんな僕でも友達ができ、友達数人とで、グループができた。だが、グループの中でリーダーのような人が出てちょっとした上下関係ができた。

ある日、そのグループでいつもどおり遊ぶとすると突然、リーダー的存在の人が、「お前嫌いな人、いるか。」と聞いてきたので、僕は「いない。」と答えた。その日は、それで会話を終えた。次の日には急に「お前、今日俺達と遊ばなくていいよ。」と言われ、仲間はずれにされた。それが何日も続いた。やっと家に誘われたかと思って言ってみると「え。お前来たのか。」と嫌な顔をされ、半分泣きながら帰ったり、「昨日、夢でお前のくろが増えてくろくなった夢を見た。気持ち悪かった。」と言われたりして、僕は傷ついた。母に相談すると「それはいじめだね。」と言われ、先生にも相談をした。すると「その人と関わらないほうがいいよ。」とアドバイスをうけた。これは「自分を守る方法」と教えてもらった僕は今、思っている。

だが、今度は「チクった。」と言われ、先生へ言えなくなった。その後も何かにつけ、嫌なことを言われ続けた。学校へ通うのも苦しくなった。また母に相談すると「無視して、グループからはなれて他に仲良くできる人を探してみたら。」と言われた。実践してみると意外と簡単に仲の良い友達ができ、また、僕をいじめ、嫌な気持ちになって、心から寄り添ってくれ、前より仲良くすることができる友達もできた。母は相手に対抗してもますます過激になるから、自分から別の環境に変えてみることを教えてくれたのだ。僕に、やっと楽しく行きたいと思える学校生活が、戻った。

すると、僕をいじめていた人は、他の子をいじめ始めた。僕にやった事と同じように。僕は、その人と仲良くしていたので、いじめられることの無いように、他の仲の良い友達と一緒に別の場所で遊んだ。その人とは、小さいケンカもたくさんしたけれど、自分の全部をさらけ出せる最高の友達として今も仲良くしている。

やはり、人としての常識が人のいやがることをしたり、僕をいじめた人と一緒になって他の人をいじめたりしなくてよかったと思う。

その後、いじめっ子はクラスのほとんどからきらわれるようになった。また、親友と呼べるような人をつくれていなかった。

今、いじめは日本でも大きな問題となっている。いじめによって自殺をしたり、生活が嘘のように変わってしまったりして人生を変える最悪なものだ。このいじめを無くしていくには、止める勇氣、言う勇氣をもつこと、相談できる環境を作ること、いじめは犯罪という常識を植え付けることが大事だと思う。

僕をいじめを受けたが、逆に心が強くなりあそこまで苦しい事を乗り越えたからどんなことでもできる！と前向きに考えられるようになった。しかし、友達や家族などの周りのサポートが無ければ、今の僕は無いと思う。この体験で、改めて周りの人の温かさとありがたみを感じることができた。

これから、自分で止めたり、受けている人を守ったりいじめを見過さず、自分と同じ思いをさせず、人の温かさを届けたい。またどんな苦しい時も感謝を忘れず、どんな高い壁でも体験を思い出して越えていきたい。

今、いじめの被害を受けている人も「話す勇氣をもって楽しい人生を送ってほしいと心の底から願っている。そして周りの人も見逃さず、しっかりサポートしてほしい。

きらめき賞



信じること

池川 友菜 (香川県・中学校2年)



私は苦手なことがたくさんあります。その中でも特に苦手なのはスポーツと人と関わることです。小学校のころ、人間関係で行き詰ったことがありました。クラスの数人の間で起こっていたトラブルにいつしか巻き込まれていたのです。それには思い当たることがありました。

まず、スポーツについてです。私は本当に体育が苦手で、チーム競技のとき、いつも迷惑をかけていました。スポーツが得意な子は、きっとミスばかりする私に、とても苛立っていたのだと思います。もう一つは人とのコミュニケーションです。ほとんど友達と話さず、オドオドして、何か聞かれても焦って答えられない。そのせいで反感を買う。

正直、学校は全く楽しいと思えませんでした。でも休もうとは1回も思えませんでした。「攻撃してくる人に負けたくない」。どんなに嫌でも休むことだけはしないと決心しました。自分を信じてみようと思いました。

当時通学していた道で、毎朝、あいさつしてくれる中学生がいました。市道を掃除しているボランティア部員でした。毎朝温かい気持ちになれ、私は中学でボラ部に入ることにしました。部について、クラスには「地味な部活」「何がおもしろいん?」と悪く言う人もいました。多くの人は、ボランティアに見下した感情をもっていると思います。スポーツをする人は優れていて、ボランティアをする人は変わっている。でもそれは偏見です。ボラ部の活動は、たくさんの素晴らしい人と関わり、たくさんの経験をすることでした。スポーツとはまた別の、輝く世界がひらけていました。

約2年の活動で、とくに印象に残っているのは、「朝ボラ」、「ハンセン病問題」、「イベントや施設の手伝い」です。

「朝ボラ」というのは、毎朝7時15分から学校前の道を掃除することです。市道は、たくさんの人が通勤、通学しています。私は始め、声を出すこと自体嫌で、あいさつもまともにできませんでした。でも毎日続けていると、私のかすかなあいさつにも、あいさつを返してくれる人がだんだん増え、嬉しくて自然に声が大きくなっていきました。

また、ハンセン病とは、めったに感染せず、薬で治る病気ですが、今なお、差別感情を持つ人がいます。私たちは大島青松園を訪れ、回復者さんと交流し、見学者に島ガイドをして、啓発活動を進めています。大島も詩人・塔和子さんの詩を墨アートにした展示会もひらきました。塔さんは、偏見や差別のなかでも、自分のいのちの価値を信じつづけました。そんな塔さんに共感した部員の想いに溢れた展示会は、大好評でした。

さらに私たちが作るいのちをテーマにした独創的な寄せ植えが評判になり、市や県のイベントから依頼されて、寄せ植えを出品しています。国立病院の屋上庭園づくりも任せられ、年間を通して多くの花を育てています。お客さんや患者さんが喜んで下さり、人と関わることの幸せを感じています。

このような経験を通して、私はコミュニケーションとは苦しみではなく、本当は楽しいことだったと気がつきました。私たちのボランティアは、偏見や差別を越えようとする挑戦です。そこにあるのは、いのちにはもともと優劣などなく、みんな等しく美しく、尊いという想いです。様々な活動、部のメンバー、出会った人々が、私に「いのちの美しさと価値」を教えてくださいました。今でもスポーツは苦手です。人と関わることも苦手なままです。でも私は今、確かに自分を信じることができます。仲間を、そしてボランティアの力を信じることができます。

きらめき賞



障害があっても

橋田 樹里愛（高知県・中学校2年）



世の中には、障害がある人と、そうでない人がいる。子どもを持っている大人は、「障害がある人には、優しくするんだよ。」と教える。本当に優しくしないといけないのか。障害があっても、なくても優しくしないといけないと思うが、障害がある人に、特別優しくするのは違うと、私は思うのだ。

私が小学校の時、障害のある男の子がいた。その子は、どんなことにも一生懸命で、誰よりも努力する子だった。でも、興奮すると、すぐ人をたたいたり、暴れたりするから、周りの人からは距離を置かれていました。小学校6年になると、色々な言葉を覚え、皆と楽しく過ごしていたけど、時々、周りから、「障害者」という言葉が聞こえてきた。それを聞いていたにもかかわらず、私は、「そんな言葉は使ってはいけない。謝罪しろ。」とは言えなかった。それは、自分が人目ばかりを気にしていたからだ。そして、今、後悔している。「あの時勇気を出して、ダメって言えば良かった。」と。今更後悔しても遅い。小学校卒業と同時に、違う学校へと行った彼の背中を、私はただ、黙って見送ることしかできなかった。体育祭での彼の頑張る姿も、私の大好きな彼の歌ももう聞けない。一緒に歌えない。当たり前のように過ごした彼との世界が突然消えたことに、自分の中で何かが切れたように悲しくなった。彼は、一人である程度のことではできていた。私や、クラスの人々の名前も覚えられたし、話し合いの時も、よく意見が出せていた。私は、うらやましいとも思った。自分の意見をはっきりみんなに伝えていたから。

障害があっても、周りの人と変わらないと私は思うようになりました。誰だって出来ないことがある。私は、人前に出て、意見を言うのは嫌だし、あまり、できたことではない。だけど、周りには障害のある人を「障害者」と言って差別する人もいます。人間、できないことがあるのは、当たり前であり、できないことをできるよう努力している人を支えてあげるのが本当の姿なのに、と私は思う。障害がある人でも障害がない人でも、優しくすることが、人間の本来の心得である。障害のある人に特別優しくすることは、心の片隅のどこかで、その人を差別していることにつながるのではないだろうか。

皆、平等に接し、誰に対しても優しくし、その分、優しくされる姿が、人間の本来のあるべき姿であると私は思う。



きらめき賞



サラマツポ

川瀬 明日香（東京都・中学校3年）



私が今回フィリピンに行くことになったきっかけの1つにウルグアイの前大統領であるムヒカ大統領の存在がありました。ムヒカ大統領はスピーチで、『貧乏とは少ししか持っていないことではなく、無限に欲があり、いくらあっても満足しないことです』と演説しています。物に溢れている国で生きている私にはあまり実感できなかったのですが、今回のフィリピンで本当の幸せ、貧困について自分なりに感じ、考えることができました。

それはボランティア活動をしている時だけ感じたわけではなく、毎日乗るバスでも多くの発見がありました。1日目の夜、ホテルに向かうバスの外を見ると東京でも見るような高いビルが立ち並び、ネオンサインが賑やかでしたが、反対の車窓は真っ暗で何も見えませんでした。しかし、あくる日の朝窓の外を見ると、夜の暗闇では見ることのできなかった今にも崩れそうな家やゴミ山があり豊かな生活と貧しい生活の近さに驚きました。

最後の訪問先の日本人のシスターがおっしゃっていた『心の乾き』という言葉が印象に残っています。日本はある余ほどの物に溢れているため、物がなくて貧しいことだと思いがちです。しかし私が会ったフィリピンの子達は物が充分でなくてもまわりの人に分けられるほどの幸せと優しさに溢れていてシスターの言葉を借りると心が潤っている子ばかりでした。その一人に、お昼を食べている時にブリックパックのジュースを飲まずに大切に抱えている子がいました。私はもしかしてマンゴージュースが嫌いなのかと思い、私のオレンジジュースと交換する？ と聞いたところ、『おうちに持って帰って家族と飲むの』とその子は言いました。私とその子と同じ小学生だった頃は自分の事しか考えてなくて、ぼんやりと生きていたのにその子は自分だけの喜びだけではなく家族のことも思っていたのです。フィリピンで出会う子どもや大人は家族や友達を大切に思い、それを正直に言葉や行動にしているところを見て心の奥に眠っていた優しさや愛情に気づくことができたような気がしました。

青年ボランティア・アクション in フィリピンは何年経っても忘れることのない貴重な体験となりました。けれどもこれをただの思い出にするのではなく、見たものの責任としてやるべきことを考えたところ一番最初に思いついたのは一生懸命勉強することです。どんなに熱い思いがあったとしても知識がなければ人に認めてもらえないし、表面的な支援活動しかできないと思います。そのように思えたのはフィリピンの子たちが家族を支えるため楽しみながらも必死に勉強していることを知ったからです。特に会話する時に欠かせなかった英語をしっかりと勉強して将来国際的に活動できる人になりたいと強く思いました。しかし支援が必要なのは私が会った子ども達だけではなく、伝統芸能鑑賞をした夕食の帰りにボロボロの服を着た男の子二人が「money money」と言いながら私を見つめていました。きっとフィリピンでは当たり前の光景であって、私が昔住んでいたマレーシアでも気づいていなかっただけで今日を生きるのに必死な人々が世界に沢山いることに気づかされた瞬間でした。それは数人の人だけで支援できる数ではないので多くの人に現実を知ってもらい、少しずつでもボランティアの輪が広がる様、学生の私だからできる活動をしていきます。

最後にフィリピンの人たち、色々な刺激をくれた31人のメンバー、この機会を作ってくださった両親とSYDの方々に感謝したいです。貴重な一週間をありがとうございました。

きらめき賞



共に笑顔で歩む

根岸 美葉（群馬県・高校1年）



私には障がいを持つ弟がいる。今では大切な弟のことを、友人に明るく話すことができる。しかし以前の私は、弟のことを友人に伝えることができなかった。「皆の兄弟と同じではない」と、弟のことを心のどこかで恥ずかしいと考えていたからだ。

だが、弟と共に過ごし様々な姿を見的过程中でその考えは変わっていった。走るのはいかに諦めずに最後まで走り切ろうとする姿、家族で行く登山で弱音を吐かない姿、失敗をしてもすぐに立ち直り、次に進もうとする姿。私にはその姿1つ1つが輝いて見えた。そして何より弟はいつも明るく笑っていて、周りの人までも笑顔にする。「ちっぽけなことで悩まなくてもいいよ」とでも言うように。

「障がいがある」と聞くと、以前の私のように後ろ向きなイメージを持つ人が多いかもしれない。しかし今の私なら「そのようなことはない」と胸を張って言える。皆が違ふのは当たり前なことなのだ。私にも弟にも得意・不得意があるように、皆が持っている個性はそれぞれ違う。1人1人の個性は個人を輝かせる最高のスパイスなのだ。

振り返ってみると、弟の様々な姿やきらきらな笑顔に多くの元気をもらってきた。辛い時でも前を向き、笑顔になれた。それと同時に私の心の持ち方も少しずつ変わっていった。

「障がいを持つ弟」が恥ずかしいのではなく、弟の存在を周りと比べていたことが見直すべきであったと気づいたのだ。それから私も、自身を周りと比較せずに自分らしく前を見て進んでいこうと思うようになった。

大切なことに気づけた私は、今までの経験や思いを生かして自分にできることを始めようと思い、その1つとしてボランティア活動に興味を持った。弟が私に笑顔くれたように「多くの人を笑顔にしたい」と思った。そして、インターネットで見つけた「障がいのある人もない人も一緒に遊ぼう」というイベントの運営スタッフに応募し参加した。

当日は、ダンボールで作った電車を引っ張る係を担当した。それには力がいり、何度もくり返し腕が痛くなったが、順番待ちをしても乗ってくれる子ども達の笑顔に、疲労が達成感へと変わっていった。

今回ボランティア活動に携わり、ボランティアをすることは決して特別なことではないと思うようになった。自分のことを必要としてくれる人と、同じ方向を向いて共に歩くことは当たり前なことだと思う。いろいろな人が共に生活しているこの社会において大切なことだ。

16歳の私は、まだ人生のほんの一部しか生きていない。その中でも、考えてみれば多くの方が私たちと向き合い支えてくれた。ボランティアの人も多くいた。そのような方々に私も弟も何度も助けられた。

「次は私の番だ。」

これからは私自身が意志を強く持ち、以前の私のように悩んでいる人やその家族を支え、必要とされる人になりたい。

人種や性別、障がいのある人ない人、いろいろな人がいるこの社会で私らしく生きていきたい。そして皆で支え合い、前を見て、共に笑顔で歩んでいきたい。

きらめき賞



夢の見つけ方

三木 想真（沖縄県・高校3年）



僕はフィリピンにボランティアに行きそこで暮らしている一部の人たちがとても貧しい生活をしているのを見て、心か締めつけられました。僕たち日本人が暮らしている環境が、当たり前だと思っていた生活が、そこには何もないという現実にも心も頭も追いつけませんでした。

ですが、そこに住んでいる子供達にとっては、その生活が当たり前の日常であり、明るく元気に過ごしている様子が見られたので、なぜかホッとすると同時に心か震えました。フィリピンで会った子供達は、みんなとても明るく、優しくかったので現地での活動中は、言葉は解らなくても仲良くなることができうれしかったです。

子供たちと交流して、小さい年齢でもがんばって勉強をしていつか親を楽にしてあげたいと願う姿に感動しました。その後もいろんな貧しい子どもたちと交流しましたが、みんなが今を一生懸命生きていて、これじゃあ、どっちがボランティアしに来たのか分からないなあって思いました。

実は、僕は時々「死にたい……」という負の感情が湧き上がることがありました。自分の中では、過小評価している事が、周りから過大評価されるのが苦しくて、自分にも周りにもイライラすることがありました。コミュニケーションがうまくいかないこともあり、「こんなつらい思いをするなら死んでしまおう」。このまま大人になったところで人に役立つような人生など想像できないし「役立たずの人生を歩んで誰かの迷惑になるくらいなら死んでしまおう」と感情的になっていました。僕には将来の夢も何もなくあったのです。フィリピンボランティアでの3日目の夜、ホテルでの中間発表の場で他の参加者は貧困の問題や日本人として何か出来るかなど、立派なスピーチをしていて驚きました。そんな中、僕は自分の中に負の感情があることをみんなの前で発表してしまいました。とても恥ずかしかったし、怖かったです。でもそんなことをさらけ出しても僕の事を受け止めてくれるような温かい雰囲気を感じました。

フィリピンでの活動の4日目に僕たちはパヤタスのゴミ山の近くに1泊ホームステイをしました。僕のホスト・ファミリーは14才のレニエール君の家でした。レニエール君には両親と弟がひとりいて、お父さんはごみ収集の仕事をしているとても貧しい家庭でした。貧しかったけど、家族はとても明るく、優しく接してくれて僕たちはタガログ語を習ったり、レニエール君の友だちと一緒にバスケットをしたりして楽しく過ごしました。ホームステイの時、レニエール君は「僕のうちは貧しいけど一生懸命勉強して、いつかパイロットになるのがぼくの夢なんだ。」と話してくれました。そして「そうしんの夢はなに？」と聞かれました。僕は少し迷いましたが、正直に「僕には夢がないんだ。」と言いました。するとレニエール君は一瞬ハッとした顔をしてから分かりやすい英語でゆっくりと言いました。「僕はそうしんが自分の夢を見つけるまでそばにいるよ」。この時も僕は心の中に何かあたたかいものを感じました。翌日のお別れの時、レニエール君に「そうしん、次はいつ来る？」と聞かれました。その時は何も言えませんでした。短い間でも、言葉があまり通じなくても、いい関係を築くことができたことをうれしく思いました。

自分たちよりも苦しい生活を送っているのに明るく希望を持って生きている子供たちと出会って、僕は自分が弱音を吐いているのか情けなくなりました。そして自分ももう少し頑張ることができるんじゃないかなと思うようになりました。この体験を通じて思ったことは、思い切って自分をさらけ出したり、周りの信頼できる人や仲間と心の中を打ち明けることで、精神的負担が軽くなるという事でした。

僕は「人との関わり合いを絶つために死んでしまおう。」と思っていましたが、フィリピンボランティアに参加して他の人と関わることで、そして現地の貧しい子どもたちと関わることで、自分を受け入れることができ、今、生きていることは幸せなことなんだ、今を一生懸命生きようと思うようになりました。そしていつか「そうしんが自分の夢を見つけるまでそばにいるよ。」と言ってくれたレニエール君に、僕の夢をはっきりと伝えに行こうと思っています。

きらめき賞



笑顔の理由は

白井 基晴（神奈川県・大学1年）

どうにも出来ないことがこの世にはある。理不尽なことは意味もなく唐突にやってくる。

僕の弟は身体障害者だ。3才の時に右足を切断し今は義足を使っている。こう言うときみんなが同情の表情を向けてくる。みんなが身体障害者に対してどんなイメージを持っているかは分からないけれど弟は僕が知るどんな人より明るいし、常におどけている。生まれた時からいつも一緒にいるから違和感はないけど初めて弟に会う人はみんなその性格の明るさに目を見開いて驚く。

僕が幼い頃に父が家を出たのでうちは母と弟と僕の3人暮らしだ。夕御飯の時は大体9割は弟が喋り、母と僕は相手をしながら箸を進めるというのか我が家のいつもの光景だ。

もちろん弟は生まれつきの身体障害者なので義足がなければ自力で立つことすら困難だ。街を歩けば不自然な歩き方をする弟は周囲の人からの視線を嫌でも受ける。自分も母もそんなことは百も承知だがこうして毎日夕御飯を楽しそうに食べる弟を見ていると時々障害者であることなんて忘れる時がある。

いつも笑顔でいる、それが僕からみた弟のイメージだ。しかしそんな弟がある時期から笑わなくなった。そしてほとんど休んだことがなかった中学校を行きたくないと言うようになった。今までこんな事はなかったし僕はもちろん、母がひどく心配した。しばらくして分かったのは弟が学校でいじめにあっているという事だった。そのことに対して僕はとてもショックを受けたし何より弟をいじめている奴らを許せないと思った。1週間、2週間、1ヶ月と弟が学校へ行かない日が続いた。僕も母もどうしたらいいのかわからなかった。そんな時ふとしたきっかけで母が提案したのがボランティアに参加してみようかという事だった。僕はこれまでボランティアなどの活動はしたことはなかったし、やってみようとする全く思わなかった。だけど少しでも弟が前みたいに笑ってくれるならと思い行ってみることにした。

内容は地域の祭りの手伝いで僕たちの他にたくさんの方がボランティアで集まっていた。そこで驚いたのは弟の初対面の人との接し方だった。僕はどちらかという人見知りで初めて会う人とうまく話せない事が多い。そんな僕の手を引っ張って弟はボランティアに来ていた人たちに笑顔で挨拶を始めた。ボランティア中も色々な人に明るい表情で話す弟はとても不登校中の学生には見えなかった。

その後もいくつかのボランティアに参加し、ついに弟は学校にも行くようになった。学校側もいじめに対応してくれたおかげで今は元どおりに通っているらしい。

僕は今回のボランティアを通して分かった事がいくつかある。まず弟は無意識で明るく振舞っているわけではないということだ。ある日のボランティアの帰り道に弟にどうしてそんなに明るく人と接することができるのか聞いてみたことがある。そしたら弟は笑いながら答えた。

「俺が兄ちゃんみたいなテンションで挨拶しても誰も返してくれないよ。」

考えてみたら当然の事だった。生まれた時から街行く人々から常に冷たい視線を浴びているのだ。そんな弟が初対面の人から好感を持って貰うには普通の人の何倍も笑顔で明るく接する必要がある。

弟が常に笑顔で人と接するのは、そうしなければ大抵の人は弟に同情的な感情を抱くか、不自然に距離をどうとずけるからだ。

弟とボランティアに参加するようになって僕の方も人と話すようになった。初対面の人に笑顔で挨拶ができるようになった。ボランティアを通じて本当に変わったのは弟ではなく僕の方かもしれない。現実には変えられない。でも大切なのはそれをどう捉えるかという事を弟は教えてくれた。弟には右足がない。その分人の何倍も明るく人と接し、みんなが弟に親しみを持つようになった。

きっとこの先も僕らはつまづくことがあるかもしれない。でも僕は弟と一緒に絶対乗り越えられる気がしてきた。

きらめき賞



働くということ、苦しむということ

河原 紫織（広島県・青年）

「もう朝が来てしまった」片道2時間掛けて通勤しなければならない。重い身体を起こす、社会人1年目の冬だった。暗い中、家を出発して、暗い中帰ってくる。手当の出ない休日出勤と深夜までの残業。しばらく太陽に当たっていないと気づいたころ、もうすでに眠れなくなっていた。仕事がある明日が来ると思うと、恐ろしくて寝れなかった。

地元広島の人に愛される書店作りがしたいと、書店チェーン店に入社。しかし、不況の出版業界で求められたのは、売上と長時間労働だった。度重なるクレームで感情が無くなる。どんなに苦しくても、どんなに厳しい労働環境でも、「新入社員は、みんな苦しんで成長するから」「どこの会社も手当は出ないよ」という周りの声を聞き、自分が未熟なだけだと言いつづけた。

2年目の夏。開店前のレジに釣り銭を入れていた。すると、紙幣がどんどん濡れてくる。気づかないうちに、ボタボタと目から涙が溢れていた。スタッフに見られたくないから泣き止みたいと思っても、拭うことさえできなかった。ただただ棒立ちで、泣き続けた。遠くから「おはようございます」というスタッフの声が聞こえた瞬間、走って逃げた。それ以来、私がレジに立つことは無かった。心療内科で適応障害の診断を受け、退職した。

診断を受けた次の日から精力的に転職活動に励んだ。新しい仕事に挑戦できる喜び。知らない業界に出会うことは、本当に楽しかった。不採用になったり、また過酷な労働環境になるかもしれないと不安になったりすることはあったが、新しい環境に身を置けることが嬉しかった。

遂に、決まった次の就職先は造船関係の技術系企業で、人事採用担当者として配属された。私の地元である広島県呉市は造船業で栄えた。書店チェーン店に入社した時の「地元で貢献したい」という意志は変わらなかった。

入社をしてから、早く戦力になるため、自主的に勉強した。図書館で人事関係の本を読み、毎日、新聞を読んだ。新しい仕事は、私に大きなやりがいを与えた。自分が採用した人材が成長し、活躍する姿を見た時、仕事をしていて本当に良かったと思う。自分が採用した人材は愛情を持って接する。

私が彼らのために出来ることは何だろう。今まで悩んで働いてきた経験を活かせることができないのか、考えた。私は自主的に国家資格キャリアコンサルタントを1年かけて勉強し、取得した。自分自身が仕事で苦しんだ経験を、自分が採用した人材にキャリア支援することで活かしたい。

書店チェーン店で働いていた時、病気になるほど苦しく辛い時期が続いた。もし、これが世間一般の仕事というのなら、これが生涯続くのであれば、もう働くことも生きることも辞めたかった。勇気を出して、退職、転職活動をするという選択をし、今がある。仕事での苦しく辛い経験をjして良かったと、やりがいを持って働いている今なら思うことができる。同時に、一緒に働いている仲間や辛い時期を支えてくれた家族に、深く感謝している。

地元広島県呉市に貢献したいと仕事に邁進していた、昨年の7月。西日本豪雨災害で被災し、広島県呉市はどの市町村よりも、最も多くの犠牲者が出た。1週間ほどは、食糧や水の確保、土砂災害の瓦礫撤去のボランティアで仕事どころではなかった。自らも知人を失うなど被災者であるにも関わらず、被害の小さい被災者が、被害の大きい被災者に対しボランティアを行うという日々が続いた。地域が日に日に疲弊していった。そのような状況の中、お越し頂いた全国のボランティアの皆様は、地域の希望であり光だった。被災してから約半年が経過した今、交通網はほぼ復旧したものの、元の姿には程遠い。今後、私は地元のために、災害で職を失った方や生活が一変した社員のキャリアコンサルティングをボランティアで行っていくつもりだ。仕事、ボランティア、2つの視点で地元で貢献していきたい。